仮想的有能感と自尊感情が理学療法士国家試験の成績に与える影響

Effect of Assumed Competence and Self-esteem on Scores in the National Examination for Physical Therapists

屋嘉比 章紘¹⁾ 小野田 公¹⁾ 谷 浩明¹⁾

AKIHIRO YAKABI, RPT, PhD¹⁾, KO ONODA, RPT, PhD¹⁾, HIROAKI TANI, RPT, MD¹⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare: 2600-1 Kitakanemaru, Otawara-shi, Tochigi 324-8501, Japan TEL +81 287-24-3000 E-mail: yakabi@iuhw.ac.jp

Rigakuryoho Kagaku 36(6): 789-792, 2021. Submitted Jun. 8, 2021. Accepted Jul. 1, 2021.

ABSTRACT: [Purpose] This study aimed to clarify the effects of assumed competence and self-esteem on the national examination results of physical therapists. [Participants and Methods] Physical therapy undergraduate students in their senior year (45 males, 45 females, average age 22.3 years) participated in this study. Participants were asked questions about assumed competence and self-esteem using Google Forms, and were categorized into four competence types (Omnipotent, Assumed, Self-respective, and Atrophy), based on the combination of their scores for assumed competence and self-esteem. A correlation analysis was performed using national examination scores and the assumed competence scores of each type of competence. [Results] The correlation coefficient between assumed competence and national examination scores was significant for the Omnipotent ($r=-0.558$) and the Self-respective ($r=0.559$) types. [Conclusion] Due to the difference in correlations, national exam guidance strategies should be considered for each type of competence, as determined by assumed competence and self-esteem scores.

Key words: assumed competence, self-esteem, national examination

要旨:〔目的〕本研究の目的は、仮想的有能感、自尊感情が国家試験の成績に与える影響を明らかにすることである。〔対象と方法〕対象は理学療法科学部生4年生90名(男性45名、女性45名、平均年齢22.3歳)であった。Googleフォームによる仮想的有能感、自尊感情の調査を行い、有能感を4タイプ(全能型、仮想型、自尊型、萎縮型)に分類した。群ごとに、仮想的有能感の点数と国家試験の自己採点による点数との相関分析を行った。〔結果〕分析の結果、全能型で有意な負の相関($r=-0.558$)、自尊型で有意な正の相関($r=0.559$)が認められた。〔結語〕タイプごとの相関の違いから、仮想的有能感と自尊感情の組み合わせに応じて、学習の指導方法を調整する必要性が示唆された。

キーワード: 仮想的有能感、自尊感情、国家試験

¹⁾ 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科 栃木県大田原市北金丸2600-1 (〒324-8501) TEL 0287-24-3000

受付日 2021年6月8日 受理日 2021年7月1日

I. はじめに

医療系養成機関の教員は、実際の実力以上に自信を持った学生から自分の能力を過剰に低く見積もる学生まで、さまざまな学生への対応を求められる。特に、国家試験対策のように一定期間で1つの目標に向かう際には、各学生の特徴にあわせた適切な個別支援が必要になる。しかし、その支援を手がかりとする学生の心理学的特徴は、個々の教員の経験に依拠するところが大きく、当の教員自身も有効な指標を常に探しているというのが現状である。

本研究でとりあげる仮想的有能感 (assumed competence) は、現代の若者の感情や動機づけの変調を説明するものとして2000年代に入ってから速水が提唱したものである¹⁾。この有能感は、一般的に自己肯定の指標として用いられる自尊感情 (self-esteem) とは異なる。自尊感情が自己の成功体験を通して、ありのままの自分を尊敬できる有能感であるのに対し、仮想的有能感は直接的なポジティブ経験に関係なく、不特定多数の他者を軽視したり、批判したりすることで自己の有能さを感じる有能感である²⁾。学校での学習について言えば、この他者軽視による有能感が高い学生は、動機づけの自律性が低く、地道な努力を嫌う傾向にあることが予測できる。実際に、高校生を対象とした研究³⁾では、他者軽視と学習量志向の間に負の相関が認められ、自尊感情が高く仮想的有能感が低い群に比べると自尊感情が低く、仮想的有能感が高い群は内発的動機づけが低い傾向がみられている。

理学療法士の国家試験対策を支援する際の手がかりになり得る心理面の指標は、ストレス⁴⁻⁶⁾や動機づけ^{7,8)}などがある。仮想的有能感については、中野による職業的アイデンティティとの関係⁹⁾や学年による経時的変化¹⁰⁾をみたものが代表的だが、国家試験の成績との間に焦点をあてた研究は見当たらない。

そこで我々は、国家試験の成績と仮想的有能感、自尊

感情の関係から、これらの指標が国家試験対策学習に対する個別支援の手がかりになり得るか、その可能性を探ることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は理学療法科学部生4年生95名のうち、調査実施に関する説明を行い、参加の同意が得られた90名 (男性45名、女性45名)、年齢22.3 ± 1.7歳 (平均 ± 標準偏差) とした。なお、本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号: 20-Io-57-2)。

2. 方法

有能感に関わる「仮想的有能感」と「自尊感情」の質問内容を説明し、Googleフォームによる回答の同意を得た。質問内容はGoogleフォームで回答可能な形にし、パーソナルコンピュータあるいはスマートフォンで送信、回答を返信させた。

仮想的有能感は2021年1月19~26日の期間で調査し、表1に示す11の設問に対して5段階評価 (1: 全く思わない, 2: あまり思わない, 3: どちらともいえない, 4: ときどき思う, 5: よく思う) で回答する形¹¹⁾とした。各設問で選択した数値の総計がそのまま仮想的有能感の点数となる。

自尊感情は2021年2月2~16日の期間で調査し、表2に示す10の設問に対して、4段階評価 (1: いいえ, 2: どちらかといえばいいえ, 3: どちらかといえばはい, 4: はい) で回答する形¹²⁾とした。点数化にあたって、設問の1, 3, 4, 7, 10は選択した数字をそのままで、設問の2, 5, 6, 8, 9は逆転項目として「はい」が1点、「いいえ」が4点となるように変換し、すべての設問の総計を自尊感情の点数とした。

国家試験の成績に関係する指標として、2020年12月

表1 仮想的有能感尺度の項目

1. 自分の周りには気のきかない人が多い
2. 他人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる
3. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い
4. 知識や教養がないのにえらそうにしている人が多い
5. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
6. 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない
7. 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い
8. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる
9. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない
10. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない
11. 世の中には常識のない人が多すぎる

表2 自尊感情尺度の項目

1. 私は自分に満足している
2. 私は自分がだめな人間だと思う
3. 私は自分に見どころがあると思う
4. 私は、たいいていの人がやれる程度には物事ができる
5. 私には得意とすることがない
6. 私は自分が役立たずだと感じる
7. 私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値ある人間だと思う
8. もう少し自分を尊敬できたらと思う
9. 自分を失敗者だと思いがちである
10. 私は自分に対して、前向きな態度をとっている

1日～2021年1月29日の期間で行われた国家試験模擬試験（計6回）の平均点、2021年2月21日に行われた国家試験の自己採点点数をとりあげた。国家試験の自己採点は、国家試験直後に業者が発表した正解予測に沿って採点した。

質問の回答より、速水ら³⁾の方法に従い、仮想的有能感と自尊感情の点数を組み合わせ、それぞれの指標の平均点を境にして、有能感を以下の4タイプに分類した。

全能型：自尊感情も仮想的有能感も高い

自尊型：自尊感情は高いが、仮想的有能感は低い

仮想型：自尊感情が低いが、仮想的有能感が高い

萎縮型：自尊感情も仮想的有能感も低い

解析は、SPSS ver.25 (IBM社製)を用いて、仮想的有能感と国家試験模擬試験の平均点、国家試験の自己採点点数との相関分析をそれぞれ全体とタイプに分けて行った。解析にあたっての有意水準は5%とした。

III. 結 果

解析の対象は、国家試験を受験した85名であった。全体の仮想的有能感 25.9 ± 6.8 点、自尊感情 26.3 ± 5.6 点であった（いずれも平均 $\pm$ 標準偏差）。国家試験模擬試験（平均点）と国家試験（自己採点点数）に対するこの2つの指標の相関係数は、国家試験模擬試験と仮想的有能感が -0.042 、国家試験模擬試験と自尊感情が 0.184 、国家試験と仮想的有能感が 0.067 、国家試験と自尊感情が 0.194 となったが、いずれも統計的に有意とはならなかった。2つの指標の組み合わせからなる4タイプの国家試験模擬試験の平均点と国家試験の自己採点点数の結果を表3に示す。

タイプ別の相関分析の結果からは、仮想的有能感と国家試験の自己採点点数の間に全能型で有意な負の相関($r = -0.558$, $p < 0.01$)、自尊型で有意な正の相関($r = 0.559$, $p < 0.01$)を認めた。

表3 4つの群における卒業試験の平均点と国家試験自己採点の結果

	卒業試験の平均点	国家試験の自己採点
全能型	168.5 ± 17.1 (n=23)	199.6 ± 15.4 (n=22)
自尊型	173.5 ± 16.1 (n=23)	205.0 ± 10.8 (n=21)
仮想型	166.1 ± 15.2 (n=21)	200.3 ± 12.6 (n=20)
萎縮型	167.3 ± 23.4 (n=23)	167.3 ± 23.4 (n=22)

点：平均値 $\pm$ 標準偏差。

IV. 考 察

本研究の対象者全体の仮想的有能感の平均値は25.9点であった。同年代の大学生を調査した研究^{13,14)}の28から29点に比べるとやや低い傾向にある。これは、理学療法士を養成する教育機関の特徴を示しているかも知れない。中野は、理学療法士養成施設の学生について、自尊型は職業的アイデンティティの形成度合いが高いこと⁹⁾や在学中に最も多いタイプ変化は全能型から自尊型であること¹⁰⁾を報告している。また、仮想的有能感が高い学生は就職に対してネガティブなイメージを持つことも知られている¹⁴⁾。こうした職業観の観点からすると、一般大学に比べ、入学時から他者に貢献する職業としての理学療法士像を描かせやすい環境が、仮想的有能感を抑える働きをしているのではないかと考える。加えて、理学療法士養成過程では、臨床実習がカリキュラムに組み込まれている。仮想的有能感¹⁾は、努力をせず他者軽視を通して自己評価を高めるもの^{1-3,11)}であるが、臨床実習では、実習指導者や患者等の他者と深く関わり、自らの能力を現場の尺度で評価されることから、根拠のない有能感を持ち続けることが難しいと言える。これらのことが、最終学年でもある対象学生の仮想的有能感が低い傾向につながっていると考えられる。

本研究の全能型における国家試験の自己採点点数と仮想的有能感の負の相関は、このタイプの学生が他者軽視の度合いを強めると、実力以上に自信を持ってしまうリ

スクがあり、これらの学生に対しては適切なメタ認知を促すことが重要になることを示唆している。

自尊型は有意な正の相関を示したが、1名を除いて国家試験の自己採点点数は190点を超えており、ばらつきも全能型に比べると少ない。190点を下回った対象学生は、実はこのタイプ中で最も自尊感情が低く、萎縮型との境界線上にあった。したがって、この点数の低さは仮想的有能感の低さというよりも、自尊感情の低さに由来するものではないかと考える。担任からの聞き取りで精神的な不安定さをみせた学生が萎縮型に多いことから、自尊感情の低い学生に対しては、経験と自己肯定を結びつけるような指導が必要になると考える。

有能感のタイプのうち自尊感情が低い仮想型と萎縮型は、仮想的有能感との相関関係は得られなかった。そのため、仮想型と萎縮型については、他の視点から多角的に捉え検討していく必要がある。

本研究は、調査を国家試験受験のほぼ1ヵ月前という時期に行っているため、それまでの国家試験対策学習の結果等が、調査時点の各学生の仮想的有能感や自尊感情に影響を与えた可能性を否定できない。したがって、これらの指標を国家試験対策における指導の手がかりにするためには、各年次の開始時に調査を行い、経時的変化を追うとともに、指標に影響を与える要因を明らかにすることが重要になるだろう。

利益相反 本研究に報告すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 速水敏彦：仮想的有能感研究の展望。教育心理学年報, 2011, 50: 176-186.

- 2) 速水敏彦, 木野和代, 高木邦子：他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から—。感情心理学研究, 2005, 12: 43-55.
- 3) 速水敏彦, 小平英志：仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連。パーソナリティ研究, 2006, 14: 171-180.
- 4) 芹田 透, 平林 茂, 高田治実・他：理学療法学科学生の国家試験受験前にみられる気分状態について—その特徴と経時変化—。帝京科学大学紀要, 2018, 14: 141-148.
- 5) 芹田 透, 平林 茂, 鳥山 実・他：理学療法学科学生における国家試験受験前の気分状態と試験成績との関連について。帝京科学大学紀要, 2019, 15: 41-47.
- 6) 和田三幸, 小野田公, 丸山仁司：国家試験前後の理学療法士養成校大学生のバーンアウト尺度の比較。理学療法科学, 2019, 34: 673-676.
- 7) 成田亜希, 宮本友弘：理学療法士養成校の学生はいかにして国家試験を乗り切るか？—グループ学習による学習動機づけの促進—。保健医療学雑誌, 2020, 11: 24-33.
- 8) 成田亜希, 宮本友弘：理学療法士国家試験対策における学習動機づけの調整スタイルの類型化とその特徴。保健医療学雑誌, 2021, 12: 52-61.
- 9) 中野良哉：理学療法学科学生の職業的アイデンティティと仮想的有能感。理学療法科学, 2012, 27: 147-150.
- 10) 中野良哉：仮想的有能感の学年による変化。高知リハビリテーション学院紀要, 2017, 19: 7-10.
- 11) 速水敏彦：他人を見下す若者たち。講談社, 東京, 2006, pp133, 157-162.
- 12) 桜井茂男：ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討。発達心理学研究, 2000, 12: 65-71.
- 13) 青山 郁, 高橋 舞：大学生におけるインターネット依存傾向, 攻撃性, 仮想的有能感の関連。日本教育工学会論文誌, 2016, 39: 113-116.
- 14) 杉本 英, 速水 敏：大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望。発達心理学研究, 2012, 23: 224-232.